

**入学時の日本語プレースメントテスト結果から見る
留学生の日本語能力の一考察
——2016～2018年度入学の留学生を対象に——**

**A Study of Japanese Proficiency based on the Results
of the Placement Test for Foreign Students
at the Time of Enrollment:
In the case of Foreign Students enrolled from 2016 to 2018**

荒 まゆみ
ARA, Mayumi

[要約]

尚美学園大学で行われている留学生を対象にした入学時の日本語プレースメントテストの結果をもとに留学生の日本語力を検証する。今回は2016～2018年度入学の留学生を対象とする。さらに、出身国（地域）での比較を行い、どのような違いがあるのかを明らかにする。

キーワード

入学時の日本語プレースメントテスト、出身国（地域）

[Abstract]

This paper demonstrates the ability of Japanese language based on the results of the Japanese Placement Test for foreign students at the time of enrollment of Shobi University. I have measured Japanese proficiency for the foreign students who enrolled in 2016-2018. This compares areas of origin, and makes it clear what kind of differences there are.

Keywords:

The Placement Test for Foreign Students at the Time of Enrollment,
Areas of origin

1. はじめに

本学の留学生は基本的に日本語が2年間の必修になっており、そのクラス編成のために、入学時と1年修了時にプレースメントテストを行っている。本学には総合政策学部と芸術情報学部の2学部あるが、キャンパスが異なっていたため、両学部合同の日本語クラスはなかった。総合政策学部の留学生だけにプレースメントテストを行い、一クラス15名程度のクラスを4クラス作ってきた。芸術情報学部の留学生は数が少ないこともあり、1クラ

スで授業を行ってきた。ただ、レベル差がないわけではなかった。2013年に両学部のキャンパスが統合されたのをきっかけに、全留学生にプレースメントテストを受けさせ、学部の垣根を越えてそれぞれのレベルに一番合ったクラスに入れるようにした。そして、2016年にこのテスト結果を分析し、いくつかの日本語力に関する考察を試みた。このときの研究は2011年度から2015年度までの入学者を対象にした。この間は中国人留学生が圧倒的に多かったが、2016年度以降は本学の留学生の出身国（地域）も変化してきた。非漢字圏の留学生が増加し、多国籍にもなっている。さらに芸術情報学部入学の留学生の伸びが著しく、2018年度は総合政策学部と芸術情報学部の留学生の数がほぼ同数となっている。このような変化から再度、留学生の日本語力の考察を試みた。

2. 留学生の出身国（地域）、入学者数の推移

表1に各年度の留学生の出身国（地域）と学生数を示した。これは全入学者数ではなく、プレースメントテストを受けた留学生の数である。筆者が現在のプレースメントテストを作成し、実施したのが2011年度からであるが、2011年、2012年は入学式前のオリエンテーションのときにテストを行っていたため、集まりが悪く、テストを受けていない留学生が

表1 各年度の入学留学生の出身国（地域）

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
受験者数	75名	51名	48名	63名	87名	129名
中国	62	43	30	31	32	64
香港	1		1	1	2	2
台湾		1		1		
マレーシア	2	2	4	4	3	10
韓国	3	1	1	5	11	25
ベトナム	3	4	9	15	37	17
ネパール	1			3	2	5
ウズベキスタン				1		
モンゴル				1		1
ミャンマー						3
スリランカ						1
フィンランド				1		
米国						1
メキシコ	2					
ドイツ	1					
オーストラリア			1			
シンガポール			1			
カナダ			1			

多かった。しかし、2013年以降は入学式後にプレースメントテストを行い、ほぼ100%の受験が可能になった。したがって、ほぼ全入学者数に近い数を示している。また、二つの学部のキャンパス統合により、芸術情報学部の留学生も受験するようになった。本学では中国からの留学生が一番多く、2014年度までは全留学生の80%以上を占めていた。しかし、2015年度から徐々に減っていき、2017年度には全体の36%になった。一方、ベトナムからの留学生は2013年度は4%にすぎなかったが、2015年度には18%、2016年度23%、2017年度には42%になっている。また、韓国からの留学生は一時減少していたが、ここ数年で大幅に伸びてきた。独立行政法人日本学生支援機構の調査では、日本に来る外国人留学生数は年々増加し、平成29年5月1日現在で267,042名に上る。上位10位が中国、ベトナム、ネパール、韓国、台湾、スリランカ、インドネシア、ミャンマー、タイ、マレーシアとなっている。本学の留学生においても、これらの出身国（地域）の留学生が多くなっている。次に、学部別に見てみる（表2）。はたして学部によって留学生の出身国（地域）に特徴が見られるのか。これを見ると、まず、中国の変化が挙げられる。2013年度は中国の留学生は総合政策学部（以下、総合）が60名、芸術情報学部（以下、芸情）が2名と、芸情には中国の留学生はほとんどいなかった。しかし、年々、芸情への入学者数が増え、

表2 各年度の入学留学生の出身国（地域） 学部別

	2013年度		2014年度		2015年度		2016年度		2017年度		2018年度	
	総合	芸情										
中国	60	2	35	8	19	11	19	12	15	17	31	33
香港		1			1			1		2		2
台湾				1				1				
マレーシア	1	1		2		4	2	2		3	3	7
韓国	1	2	1			1	4	4	2	9	7	18
ベトナム	2	1	4		9		12		34	3	16	1
ネパール	1						3		2		5	
ウズベキスタン							1					
モンゴル							1				1	
ミャンマー											2	1
スリランカ											1	
フィンランド								1				
米国												1
メキシコ	1	1										
ドイツ		1										
オーストラリア						1						
シンガポール						1						
カナダ						1						

2017年度、2018年度は総合を上回るようになった。韓国も芸情が総合を上回っている。ベトナムは総合が圧倒的に多い。人数は少ないものの、芸情は多国籍となっている。

3. 研究目的

筆者は本学で行っている入学時日本語プレースメントテストの信頼性を立証し、このテスト結果から留学生の日本語力の実態を報告した(荒2016)。このときは2011年度から2015年度までの留学生が対象であった。しかし、2016年度以降、留学生の出身国(地域)の変化、芸情の留学生の伸びなどから、さらなる分析が必要となってきた。今回は、引き続き留学生全体の日本語力、学部別の分析に加え、出身国(地域)による比較を行う。今後の指導のためにも、本学留学生の最新の日本語力と出身国(地域)による違い(違いがあるかどうか)の考察を試みる。

4. 研究方法

年々、本学の留学生の日本語力は下がってきていると言われてきたが、筆者は2016年の報告で留学生の日本語力は下がっていないことを立証した。また、2014年度以降、「総合」より「芸情」の留学生の日本語力の方が高いことがわかった。しかし、標準偏差は「芸情」のほうが大きく、日本語力のばらつきが大きいこともわかった。2016年度以降はどうか、この2点の立証を行う。さらに、今回は出身国(地域)ごとに日本語力を比較し、どのような特徴が見られるのかを明らかにする。2016年の報告では、出身国(地域)での比較は行っていない。今回は各出身国(地域)の留学生数の増加により、比較できるだけのグループ分けができたことで可能になった。グループは「中国」「韓国」「台湾・香港・マレーシア」「ベトナム」「その他の非漢字圏」の5つに分けた。本学のマレーシア人は中華系であり、漢字は理解できるので、台湾・香港と同じグループにしている。

4-1 留学生の日本語力は下がっているか

2016年に2011~2015年度の入学時のプレースメントテストの得点から一元配置の分散分析を行った。その結果、P値は0.18で5%より高く有意差は見られなかった。統計学的見地からは、留学生全体の日本語力は年々低下しているとは言えないという結果になった。今回は2016~2018年度のプレースメントテストの結果を分析する。表3は2016~2018年度の入学時の日本語プレースメントテストの受験者数と結果である。平均点、最高点、最低点、標準偏差を示した。これを見ると、2016年度の受験者数は63名、2017年度は87名、

表3 2016~2018年度の入学時の日本語プレースメントテストの結果

	2016年度	2017年度	2018年度
受験者数	63名	87名	129名
平均点	50.98	50.32	54.59
最高点	92	92	96
最低点	17	8	11
標準偏差	19.78	19.04	18.12

2018年度になると129名と一気に増加している。平均点は2016年度50.98点、2017年度50.32点とほとんど変わらないが、2018年度には54.59点になっている。ただ、2011～2015年度の5年間の平均点は55.50点なので、この5年間と比べると低くなっている（荒2016、P.74）。最高点はいずれの年度も90点台であるが、最低点を見ると、2017年度は一ケタの数字となっている。

図1は得点のばらつきをヒストグラムにしたものである。2016年度は41～50点が一番多く、2017年度は61～70点、2018年度は51～60点が一番多くなっている。

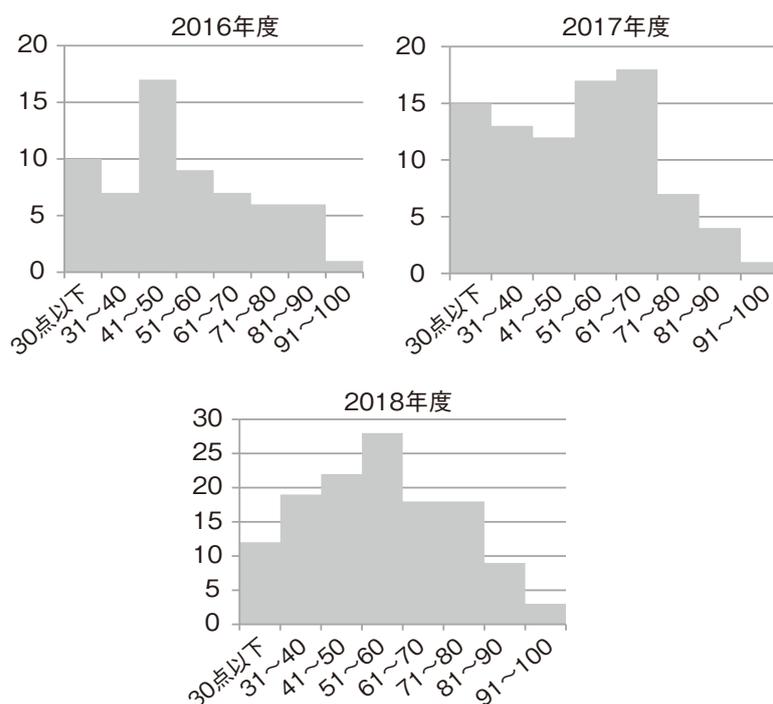


図1 2016～2018年度の入学時の日本語プレースメントテストの得点のヒストグラム

次に、一元配置の分析を行った（Excel 2010）。その結果、P値は5%より高く、有意差は見られなかった。したがって、留学生全体から見ると、日本語力が低下しているとは言えないという結果になった。2013年度から2018年度のP値も5%より高く、有意差は見られなかった。2013年度以降、本学の留学生の日本語力は下がっていないことになる。

4-2 学部間による日本語力の違い

2016年に行った分析では、2013年度は両学部での有意差は見られなかったが、2014年度、2015年度は「芸情」のほうが「総合」より日本語力が高いという結果になった（荒2016、P.80）。2013年以前はデータがないため、以前からこのような結果であったかどうかは調べられないが、少なくとも2014年度以降は「芸情」の留学生のほうが日本語力は高くなっている。しかし、標準偏差は「芸情」のほうが大きく、日本語力のばらつきが大きいことがわかった。2016年度以降はどのようになっているか分析を行った。表4にそれぞれの学部の受験者数、平均点、最高点、最低点、標準偏差を示した。これを見ると平均点

がすべての年度で「芸情」のほうが高くなっている。両学部の差は2016年度11.67点、2017年度14.67点、2018年度9.94点といずれの年も10点ほどの差がある。図2はその平均点をグラフにしたものである。次に、最高点を見ると、芸情のほうが10点以上高くなっており、特に2017年度は16点もの開きがある。最低点は両学部も変わらない。P値はすべての年で5%以下で、統計学的見地から見ても、「芸情」のほうが「総合」より日本語力が高いことが明らかとなった。しかし、ばらつきを見ると、いずれの年も「芸情」のほうが大きく、やはり「芸情」の留学生の日本語力の差が大きいことがわかる。これらの結果は2016年度までの結果と同様である。

表4 2016～2018年度の入学時の日本語プレースメントテストの結果（100点満点）

年度	総合政策学部			芸術情報学部		
	2016年度	2017年度	2018年度	2016年度	2017年度	2018年度
受験者数	42名	54名	66名	21名	33名	63名
平均	47.09	44.75	49.74	58.76	59.42	59.68
最高点	82	76	84	92	92	96
最低点	17	8	13	17	9	11
標準偏差	17.15	16.57	15.31	22.24	19.31	19.40

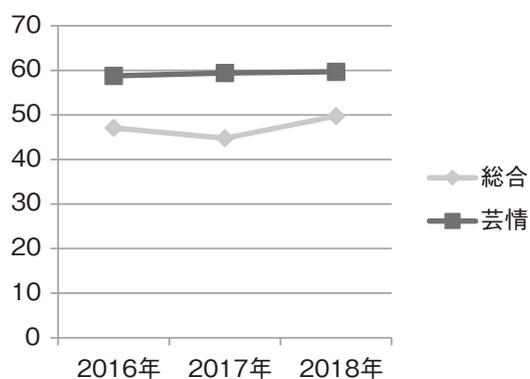


図2 入学時のプレースメントテストの平均
- 2016～2018年度の学部別平均点 -

4-3 留学生の出身国（地域）による違いはあるか

留学生の出身国（地域）によって日本語力は違うのか。ここでは「中国」「韓国」「台湾・香港・マレーシア」「ベトナム」「その他の非漢字圏」と5つのグループにして比較を試みた。台湾、香港は漢字圏、そして、マレーシアは中華系の留学生なので、一つのグループにした。その他の非漢字圏にはネパール、ミャンマー、ウズベキスタン、外モンゴル、スリランカ、フィンランド、米国が入る。表5に5つのグループの人数を示す。2016～2018年度の合計は「中国」が一番多く127名、次いで「ベトナム」69名、「韓国」42名、「台湾・香港・マレーシア」23名、「その他、非漢字圏」19名となっている。

表5 2016～2018年度の新入留学生の出身国（地域）

	2016年度	2017年度	2018年度	合計
中国	31名	32名	64名	127名
ベトナム	15名	37名	17名	69名
韓国	6名	11名	25名	42名
台湾・香港・マレーシア	6名	5名	12名	23名
その他、非漢字圏	6名	2名	11名	19名

表6は5つのグループの各年度の平均点と3年間の平均点を示したものである。3年間全体の平均点を見ると、「韓国」が一番高く71.07点となっている。次いで、「台湾・香港・マレーシア」の65.96点、「中国」48.91点と続く。「ベトナム」46.59点、一番平均点が低いのが「その他の非漢字圏」で42.16点となっている。年度ごとに見ても「韓国」は毎年度平均点が一番高く、「台湾・香港・マレーシア」がどの年度も「韓国」に次ぐ。「ベトナム」は2016年度と2018年度に「中国」よりも平均点が高くなっている。しかし、一元配置の分析の結果は0.36で5%より大きく有意差は認められなかった。

表6 2016～2018年度の各グループの平均点

	2016年度 平均点	2017年度 平均点	2018年度 平均点	3年間の 平均点
中国	46.84	53.75	47.50	48.91
ベトナム	47.40	42.30	55.24	46.59
韓国	81.33	67.09	70.36	71.07
台湾・香港・マレーシア	66.17	58.20	69.08	65.96
その他の非漢字圏	43.50	32.00	43.27	42.16

4-4 留学生の出身国（地域）による問題項目比較

次に、5つの出身国（地域）をテストの問題項目ごとに比較してみる。平均点では「韓国」がトップであったが、問題項目を比較してもすべてにおいてトップなのか、また、出身国（地域）によって、何か特徴が見られるのか分析を行った。表7に2016～2018年度の問題項目の平均点を示した。これを見ると、「韓国」が問題Ⅳの読解以外すべての項目で一番高くなっている。「台湾・香港・マレーシア」はすべての項目において、韓国に次ぐ。「その他の非漢字圏」は問題Ⅰの動詞の活用以外すべての項目で一番低い。「中国」と「ベトナム」は項目により順位が入れ替わる。「中国」は問題Ⅰの動詞の活用が5グループ中一番低く、問題Ⅳの読解が5グループ中一番高い。「中国」は項目によりできるものとできないものの差が大きい。

表7 2016～2018年度の各グループの問題項目ごとの平均点

各問題と配点	設問項目	中国	ベトナム	韓国	台湾・香港・マレーシア	その他の非漢字圏
問題Ⅰ (30点)	動詞の活用	10.8	14.0	18.2	15.3	11.5
問題Ⅱ (18点)	接続詞・授受動詞	11.3	11.3	14.1	13.4	10.8
問題Ⅲ (12点)	文法 (語順)	6.1	6.3	10	8.7	5.3
問題Ⅳ (6点)	読解－指示語	5.0	2.6	4.7	3.7	1.9
問題Ⅴ (20点)	読解－内容理解	10.5	8.9	16.4	14.5	5.7
問題Ⅵ (4点)	文の完成	1.9	2.1	3.1	2.6	1.8
問題Ⅶ (10点)	記述	4.6	2.6	5.9	5.8	2.3

「中国」は基礎力を問う動詞の活用、適切な文法を用いて正しい文にする項目が弱いことで、それらを問う問題Ⅵの文の完成も平均点が低くなっていると考えられる。「ベトナム」は「中国」と差のない項目も多いが、記述で大きく引き離されている。各問題項目の5つのグループ全体の平均点を見ると、問題Ⅲの文法 (語順) が一番低く、次いで問題Ⅶの記述、問題Ⅰの動詞の活用となっている。この全体の平均点が低い問題Ⅰと問題Ⅲに関しては「ベトナム」が「中国」より高くなっている。特に、問題Ⅰはいずれの年度も「ベトナム」が「中国」より高い。問題Ⅰの動詞の活用を取り上げてみる。菅谷 (2010) は「日本語母語話者が個々の動詞の活用形を記憶し、ボトムアップで処理をする傾向があるのに対し、学習者はトップダウンで規則を適用する傾向があると推測される」と述べ、それを実証している。日本語学習者による動詞活用の習得については、さらに、日本語レベルが高くなるほど活用規則を正確に適用できることが観察されたとしている。さらに、次のようにも述べている。

第二言語としての日本語の動詞活用においては、トップダウンで規則を適用する能力と、一つ一つの活用形を記憶する項目学習の働きの両者が関わっていると推測される。－中略－ より母国話者の規範に一致した活用ができたのは上位群であり、下位群には「*飲めよう」「*着った」のように、母語話者には見られない活用形が散見された。

本テストの動詞の活用問題は、活用形と活用規則を正しく適用させるという2つの要素からなっている。したがって、活用形の誤用なのか活用規則の間違いなのか、今後は両面からの分析が必要になるだろう。ちなみに、2018年度の結果を見てみると、全体としては活用形の誤用のほうが多くなっている。特に、受身形は20%、使役形はわずか4%しかできていない。ただ、使役受身形は18%の留学生ができていたので、使役と受身の活用規則はできていることを考えると、やはり、文型の理解が足りず、活用形 (本テスト結果の場合は特に使役形) の誤用をしていることになる。一方、活用規則の間違いでは、高得点を取った留学生でも「着っている」「着った」としている者がいる (2018年度に96点の最高点を取った留学生が間違えたところは動詞活用の2問だけであった。使役形にできなかつ

たものと「着っている」としたものだ)。菅谷は五段と一段の区別が習得困難点の一つであることが示唆されると述べているが、ほぼ満点のこの留学生も五段「切る」と一段の「着る」の区別ができていなかったことが考えられる。活用規則以前に日本語の動詞のグループ分けが正確に覚えられていないことは明らかである。この動詞活用項目の平均点を2012年度と比較してみても、2018年度も変わっていない。2年次クラス分けのテストでも動詞活用の得点は低く、1年たっても依然定着できていないことがわかっている(荒2016)。動詞の活用は初級で教わってきたもので、今さら取り上げて学ぶ必要はないと考えている留学生が多いのかもしれない。この動詞の活用の教え方については、今後さらに検討をしていきたいが、いずれにしろ、本学の留学生においても動詞の活用という初級文法の基本の定着ができていないことは今後の課題として残る。さらに、動詞の活用問題で「ベトナム」が「中国」より点数が高くなっていることには何か母語の影響があるのか。しかし、ベトナム語も中国語も動詞の活用がない点で母語の影響は考えにくい。「ベトナム」と「中国」のこの違いが何から来るのか、あるいは偶然の結果なのか、さらに研究を続ける必要がある。

5. 結果

今回、2016～2018年度の新入留学生の日本語力をみるために、入学時のプレイスメントテストの結果をもとに検証を行った。まず、留学生全体の日本語力を検証した。3年間のプレイスメントテストの平均点は年々上がっている。しかし、統計学的見地から検証したところ留学生の日本語は下がってはいないが、上がっていないことも立証された。次に、学部間の比較を試みた。学部間では「芸情」のほうが「総合」より日本語力が高いことがわかった。これら2つの結果は、2011～2015年度の結果と同じである。今回は新入留学生の増加、多国籍化が進んでいることを受けて、さらに出身国(地域)を5つのグループに分け、検証を行った。5つのグループは「中国」「韓国」「台湾・香港・マレーシア」「ベトナム」「その他の非漢字圏」とした。その結果、一番日本語力が高いのが「韓国」、次いで「台湾・香港・マレーシア」、そして、「中国」、「ベトナム」、「その他の非漢字圏」と続いた。プレイスメントテストには漢字の試験は入っていない。読解問題はあるが、いずれも短文であり、使用している漢字もL2、L3レベルのものがほとんどである。それにもかかわらず、非漢字圏の学生が一番日本語力が低いという結果になった。さらに、テストの項目別に5つのグループを比較してみた。すると、ほとんどすべての項目において、「韓国」の平均点が一番高く、「その他の非漢字圏」の平均点が動詞の活用を除き、一番低かった。また、この比較で「中国」の力のムラが明らかになった。基本的な動詞の活用、文法、文型の定着が弱く、それが文の完成問題のできに響いていることがわかった。この項目では非漢字圏の「ベトナム」のほうが「中国」よりも平均点が高かった。

6. 考察とまとめ

2016年度以降、本学の留学生数は増加しており、特に、2018年度は前年比1.5倍になっている。また、芸情の留学生数の伸びが著しく、2018年度は総合とほぼ同数の留学生数となっている。ほとんど総合で占めていた中国に至っては2017年度以降、総合よりも多くなっている。近年、韓国からの留学生は減ってきてつつあったものの、2018年度は前年比1.68倍

増となっている。今回、留学生の増加、多国籍化に合わせて、過去3年間の新入留学生の日本語力を分析してきた。その結果、2016年に調べた2011～2015年度の留学生と際立った差は見られなかった。本学の受験条件が日本語能力試験L2か、日本留学試験の日本語が200点レベルであることは変わっていないので、本学を受験する留学生の日本語力も変化がないのは当然かもしれない。ただ、今回、出身国（地域）を5つのグループ分け、検証した結果、新たな発見ができた。平均点では「韓国」が一番高く、以下「台湾・香港・マレーシア」「中国」「ベトナム」「その他の非漢字圏」と続いた。「韓国」「台湾・香港・マレーシア」はすべての問題項目において安定した順位を保っていたが、「中国」と「ベトナム」は年度により、また問題項目により、順位が入れ替わっている。さらに、「中国」は動詞の活用において「その他の非漢字圏」よりも平均点が低く5グループ中最下位となっている。動詞の活用問題は全体的に見ても平均点が低く、定着が図れていないことが明らかであるが、この「中国」の結果は何を意味するのか。「中国」と「ベトナム」のこの結果から何か明らかになることがあるのか、単なる偶然の結果なのか、今後も分析、研究を続け、留学生の指導にいかしていきたい。

引用・参考文献

- (1) 荒 まゆみ (2016) 「入学時の日本語プレイスメントテスト結果から見る留学生の日本語能力の一考察」『尚美学園大学総合政策学部総合政策研究紀要第27号』
- (2) 奥村訓代 (2005) 「大学の学部における日本語教育の使命と役割－PowerPointを利用したプレゼンテーション授業の実践－」『日本語教育126号』 pp.55－64
- (3) 菅谷奈津恵 (2010) 「日本語学習者による動詞活用の習得について－造語動詞と実在動詞による調査結果から－」『日本語教育145号』 pp.37－48